

国際社会医学講座 医学教育・倫理学

1. 領域構成教職員・在職期間

准教授	西村 高宏	20151019～現職
-----	-------	-------------

2. 研究概要

研究概要

【医療現場及び医学教育における「哲学的対話実践」導入に関する批判的検討】

医療（科学）技術の急激な発展、「2025年問題」などといった超高齢社会の到来による社会構成の劇的な変化に伴い、医療やケアの現場ではこれまでに例をみないほどの大きな変化に晒されつつある。具体的には、在宅ホスピスケアなど人生の最終段階におけるニーズの多様化、医療現場を支える専門職者間の関係（多職種連携から「超職種」へ）と学問的アプローチの複雑化、さらには度重なる大規模災害などを契機とした医療専門職者と市民との関係の変化などが挙げられる。

そういった混沌とした状況に伴い、医療現場では今、医師や患者、そして家族に関わりなく（あるいは「ケアする者」「ケアされる者」に関わりなく）、全ての者がそのつど自らの死生観や人生観、（古い）親、職業観などといった様々な価値観・基準の問い直しを迫られる状況にある。それらは、これまでの（専門職者）親や専門職教育、さらには各施設内における小手先のマニュアルだけでは到底対応できそうもない課題となっている。

そういった背景から、昨今、海外の医療現場（医学教育も含む）では、賛成／反対といった党派的なところから議論を始めるディベートやディスカッションなどとは異なり、それぞれの立場や考えを乗り越え、目の前のものごとに対して適行的な（哲学的な）問いを投げかけ、他者との（対話）をとおして改めて自分自身の考えを逞しくしていく哲学的な対話実践が導入されつつある。韓国やオランダの医療機関では、患者の治療方針などを決定する際にも哲学対話が導入されている。とくにオランダでは、臨床倫理の切り口から、医療チームが主体となって病棟内で行う解釈学的対話型のケース検討法（MCD/Moral Case Deliberation）が積極的に推進されている。そこには、現在の医療現場が、もはや従来の医療（臨床）倫理的なアプローチ（原則主義やマニュアル）からだけでは到底解消しきれないような複雑な状況や関係性のうちに置かれていること、さらにはそういった状況での新たな価値観の問い直しの必要性に迫られていることが窺える。

上記の問題意識をもとに、1980年代以降「哲学における新パラダイム」として欧米において活発になりつつある「哲学プラクティス（哲学的実践）」の動向を確認しつつ（MCDとの差異も明確しつつ）、新たに医療現場や医学教育において「哲学的対話実践」を射し込むことの意義やその可能性（及びその限界）を批判的に検討する研究活動を継続している。

キーワード

臨床哲学 哲学プラクティス 医学教育 哲学的対話実践

業績年の進捗状況

2015年10月に本学に着任して間もないが、すでに2015年度は県外の病院（石巻赤十字病院）や緩和ケアクリニック（宮城県大崎市・穂波の郷クリニック）などと連携し、医療現場における「哲学的対話実践」を複数回開催している。この活動は現在も継続的に行なっており、この試みの批判的な検討もあわせて開始するなど、研究は順調に進んでいる。2016年3月からは、本学内及び福井県内においても、病院内だけでなく一般の市民も交えて、医療従事者、医学生などの垣根を超えた哲学的な対話実践の場を拓き始めている。今後は、ここでの実践も踏まえながら研究論文として纏め上げ、国内外の学会などにおいて積極的に発表していく予定である。

特色等

本研究の特色は、いわゆるヘルス・コミュニケーションの場に、従来には見られなかった哲学的対話実践の試みを挿し込むことによって、医療現場および医学教育におけるコミュニケーションを一層充実させるという、独自の意図がその背後にあることである。

昨今、医療現場での人間関係及び対人交流を促進させる目的で、様々なヘルス・コミュニケーションのモデル構築が企図されている。そこでは、いわゆる医療者-患者間、専門職者間などにおけるスムーズな情報の伝達・交流・交渉を目的とした水平的な対話志向が目指されていると言える。最近では、ワールド・カフェ形式を利用し、専門家と非専門家間の心理的距離を縮めることを目的としたカフェ型のヘルス・コミュニケーションなども試みられている。

しかしながら、それらのうちには、そもそも健康問題に関する自分自身の考えや価値判断を逞しくする機会を与える垂直的な対話志向の発想が希薄である。これでは、医療の場における様々な利害関係者間での情報の伝達・交流の風通しが良くなるだけでなく、むしろ医療問題に関する意思決定の際に前提とされている個々人の考えや価値判断が逞しくなることは望めない。医療現場におけるヘルス・コミュニケーションをさらに充実したものにするためには、それらの情報の伝達（交流）という水平的なヘルス・コミュニケーションの発想からいったん距離をとり（問い直し）、他者との対話をとおしてあらためて自分自身の考えや価値観を逞しくする垂直的な対話志向である「哲学的な対話実践」が欠かせない。本研究の特色は、このような試みを1980年代以降、欧米において積極的に展開しつつある「哲学プラクティス（Philosophischen Praxis）」の切り口から批判的に検討する点にある。ちなみに、「哲学プラクティス」とは、ドイツの哲学者ゲルト・アヘンバッハ（Gerd B. Achenbach）が始めたこととされる。「哲学プラクティス」とは、専門家や研究者のみによって独占されるものとしての哲学ではなく、広く社会のなかで実践される哲学のあり方を模索する運動であり、哲学書に記された言葉、既存の知識から出発するのではなく、対話の参加者が日々の生活や社会について考える問題から哲学的な対話をはじめることが共通する特徴と言える。「哲学的実践」の主唱者の一人であるエラスムス哲学実践研究所（Erasmus Institute For Philosophical Practice）のピーター・ハーテロー（Peter Harteloh）も、同じく「哲学的実践」を「（従来の）アカデミックな哲学があまりに言葉倒れて、日常生活における諸問題や主題からあまりに乖離してしまったことへの批判から始まった20世紀の動向」と位置づけたうえで、さらにそれをフランスの哲学者であるピエール・アド（Pierre Hadot, 1922-2010）に倣って、「哲学をひとつの生き方として（comme manière de vivre）再定義する試み」として解釈しようとしている。

本学の理念との関係

「真理を探究する、知への愛—」「人命を尊重し病者に共感する、人への愛（「人命を救うという無我の愛）」

現在取り組んでいる研究は、本学の理念における「真理を探究する知への愛」、「人命を尊重し病者に共感する、人への愛（「人命を救うという無我の愛）」をまさに下支えるものと言える。医学の発展は、真理を探究し続ける「知への愛」が必要とされるべきである。そのためには、何よりも自分自身の「無知」を自覚し、つねに真理の側へと身を置き、それを不断に求め続けることをみずからに課す、極めて厳しい愛が求められる。したがってここでは、まずは、医療現場や医学教育・医学研究の場において、（いのち）の取り扱いに関する自分自身の考えや価値観（価値判断及び価値基準）を徹底的に吟味し、逞しくする機会を積極的に儲けていく必要がある。本研究は、そういった意味において、最先端の医学・医療をつねに求め続け、その発展に貢献できる医療者・研究者を養成することを目指す本学の理念とも合致する。このような試みが、最終的に「人命を尊重し病者に共感する、人への愛（「人命を救うという無我の愛）」へと繋がっていく。

3. 研究実績

区分	総数		インパクトファクター（うち原著のみ）	
	2016～2021年分	2022年分	2016～2021年分	2022年分
和文原著論文	0	0	—	—
英文論文	ファーストオーサー	0	0(0)	0(0)
	コソボ ンディング オナー	0	0	0(0)
	その他	0	0	0(0)
	合計	0	0	0(0)

(A) 著書・論文等

(1) 英文：著書等

a. 著書

b. 著書（分担執筆）

c. 編集・編集・監修

(2) 英文：論文等

a. 原著論文（審査有）

b. 原著論文（審査無）

c. 原著論文（総説）

d. その他研究等実績（報告書を含む）

e. 国際会議論文

業績一覧

(3) 和文：著書等

a. 著書

b. 著書（分担執筆）

c. 編集・編集・監修

22102001 西村高宏：つくる〈公共〉50のコンセプト，他者と対話する，岩波書店，68-71，20220216，DOI：978-4-00-023904-2

(4) 和文：論文等

a. 原著論文（審査有）

b. 原著論文（審査無）

c. 総説

22102002 西村高宏：「哲学対話」の作法～医療現場に「哲学対話」を挿し込む，治療，32(6)，453-456，202211

22102003

西村高宏：医療現場における「倫理教育」の困難さ～“moral sensitivity”を遅くするために～，日本顎顔面インプラント学会誌，21(2)，103-106，20220825

d. その他研究等実績（報告書を含む）

e. 国際会議論文

(B) 学会発表等

(1) 国際学会

a. 招待・特別講演等

b. シンポジスト・パネリスト等

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(2) 国内学会（全国レベル）

a. 招待・特別講演等

b. シンポジスト・パネリスト等

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(3) 国内学会（地方レベル）

a. 招待・特別講演等

22102004 西村高宏：“医療倫理学”の意義とその実際，第335回日本小児科学会北陸地方会（第25回福井地方会合同開催），20220612

b. シンポジスト・パネリスト等

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(4) その他の研究会・集会

a. 招待・特別講演等

22102005 Takahiro Nishimura: The Significance and Possibilities of Introducing “Philosophical Dialogue” in Medical Practice: The Necessity of a Vertically Dialogic Orientation in Medical Settings, Philosophical Practices in Healthcare Settings, 20220901

b. シンポジスト・パネリスト等

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(G) 特許等

区分	内容（発明の名称）	発明者又は考案者
----	-----------	----------

(D) その他業績

4. グラント取得

(A) 科 研 費 ・ 研 究 助 成 金 等

区分	プロジェクト名	研究課題名	代表者名	分担者名	研究期間	金額（配分額）
----	---------	-------	------	------	------	---------

業績一覧

区分	研究種目	課題名	代表者名	分担者名	研究期間	金額(配分額)
文部科学省科学研究費補助金	基盤研究(C)	イタリアの取り組みから読み解く精神保健医療福祉における「哲学的対話実践」の可能性	西村 高宏	近田 真美子, BALDARI Flavia	20210401-20240331	¥2,080,000
文部科学省科学研究費補助金	基盤研究(C)	医療現場における「哲学的対話実践」モデルの構築	西村 高宏	近田 真美子, 田村 恵子, 孫 大輔	20180401-20230331	¥0

区分	機関名	課題名	研究者名	研究期間	契約金額
区分	機関名	課題名	研究者名	研究期間	契約金額

(B) 奨学寄附金

受入件数	0
受入金額	¥0

5. その他の研究関連活動

(A) 学会開催等

区分	主催・共催の別	学会名	開催日	開催地
区分	主催・共催の別	学会名	開催日	開催地

(B) 学会の委嘱

学会の名称	役職	氏名
日本生命倫理学会	一般会員	西村 高宏
日本倫理学会	一般会員	西村 高宏
日本医学哲学・倫理学会	一般会員	西村 高宏
日本メルロ＝ポンティサークル	一般会員	西村 高宏
関西倫理学会	一般会員	西村 高宏

(C) 座長

国内学会 (全国レベル)	学会名	氏名
国内学会 (全国レベル)	学会名	氏名

(D) 学術雑誌等の編集

学術雑誌等の名称	査読・編集	委員長(主査)・委員の別	氏名	査読編数
学術雑誌等の名称	査読・編集	委員長(主査)・委員の別	氏名	査読編数

(E) その他